

近江日野商人と
花のまち日野
花だより

大字音羽にある「雲迎寺」は、境内いつぱいにサツキが生い茂り、「さつき寺」と呼ばれています。6月上旬には紅一色に花が咲き誇り、その様子はまるで「花の津波」のようです。ぜひ一度、「花のまち日野」の美しいサツキをご観賞ください。

◆問い合わせ先
日野観光協会
商工観光課
☎ 6577 有線 61320
☎ 6562 有線 58965



「日野まちかど感応館」に決まりました

かんのうかん

大字村井の古い町並みにある「旧正野薬店」は、かつて「万病感応丸」を開発された正野玄三さんのお店でした。現在は、日野観光協会の事務所として活用され、観光情報発信の拠点となっています。

このほど、この旧正野薬店の愛称が決まりました。愛称は、「日野まちかど感応館」です。愛称募集には106名の応募があり、その中から梶原ケイさん（東近江市）・木瀬昭子さん（日野町）がご応募された「感応館」が選ばれました。

これからも、皆さんにより一層、親しまれる施設となることでしょう。

感雑向綿

日野町長 藤澤直広

朝の連続テレビ小説「どんど晴れ」が4月から始まりました。「どんど晴れ」とは「めでたし、めでたし」という意味だそうです。

主人公は横浜の洋菓子店の娘であるケーキ職人の夏美が岩手県盛岡市の老舗旅館の跡継ぎ息子と結婚し女将になるというストーリーです。彼の実家に挨拶にいったとき、広間に親類縁者がずらりと並ぶ場面で「まるで時代劇みたい」とびっくり。彼女の母親が「外国に行くわけでもない」とつぶやいていましたが、横浜からみれば昔ながらのしきたりや風習が残る東北のまちは、まさに「外国」のようなものだったのです。確かに都会暮らしと田舎暮らしではもはや「外国」と思えるくらいの差があるのかも知れません。「田舎に泊まるう」という番組に人気がありますが、田舎には都会にない良さがあるのだと思います。人付き合いのうつつしさも不便さもあるけれど、人が生きていく上で大切な人と人の絆があり温かさがあるのだと思います。

今、格差社会といわれる中で、都市と田舎の格差も広がっています。「限界集落」という言葉があります。高齢化し人が減り、集落機能が維持できず存在しつづけることができない集落のことです。この国のどこに住んでいても幸せな生活が送れることこそ政治が果たすべき役割だと思います。憲法13条には「幸福追求に対する国民の権利については、国政の上で、最大の尊重を必要とする」とあります。こうした憲法の精神が活かされる国づくりが必要だと思えます。

日本国憲法は昭和22年5月3日に施行され今年で60周年を迎えます。憲法は「国民主権」「平和主義」「基本的人権の尊重」を三大原則としています。その精神は世界に誇れるものだと思います。今、憲法「改正」の議論がされていますが、103条からなる憲法のそれぞれ条項は、珠玉のように素晴らしいものであり、それらを実践し、温かい社会を築きたいと思っています。「どんど晴れ」。

